古時計とオジサン

札幌市医師会
札幌清田病院
後藤　義朗

クリスタルの置物に付く丸時計が止まった。すでに夕暮れの日曜日。近所の時計屋さんに出かけてみた。ここには初めて。間口は１間ばかりで、店のショーケースには、ビニールの小袋に入った時計が山積みだ。修理品のようだが袋の色が変わっている。出てきたのは歳の頃70歳後半のオジサン。片目に拡大鏡を付けて、まさに時計屋さんだ。時計を受け取ると、表裏を何度もひっくり返している。「留め金の場所が分からない」と言われてもこちらも困る。小さな平たい工具を使いなんとか蓋を開けたが、中を見るなり「seikoの一流品、腕時計と同じものだ」とオジサンは怒ったように言った。「記念品で頂き物なんです。20年は経っているかな？」と言い訳をしたが、聞こえていない。

電池を支える小さなビスをネジ回しで回すと、小さな電池がトレーにポロリと落ちた。新品の電池の裏に何かを書いて戻した時「ビスはどこだ」と声を発し、拡大メガネでトレーの中を探していた。『そこですよ』と、思わず声が出そうになったが、飲み込んだ。その後、蓋がはまらずまた四苦八苦。カチッ！　おお、よかった。次はリューズ（龍頭）が動かない。これでは時刻調整ができない。不都合は一気に重なるものだ。

ついに奥にいる息子さんを呼んだ。若者は時計を見るなり「蓋に引っかかっていないが、リューズ周囲が固くなっている」とすぐ直した。別の機器で時計の信号音を確認しながら、水晶発振器を見て時を合わせた。持参の時計は年代物だから油でも点してくれればいいのにと思ったが、それは「分解掃除」の扱いで別料金とのこと。その後、時計歩度で「日差」を検査した。結果は0.3秒。３日に１秒の狂いなので許容範囲と太鼓判を押してくれた。店にいた約30分が随分長く感じた。お客さんの方がドキドキ、ハラハラする時計屋さんだった。

掛け時計がある壁の真ん中に賞状が５～６枚光っていた。１級時計修理技能士と指導者の証明書だ。いくら腕が立つ職人でも、裏蓋が開かなければ何もできない。最近の時計は電子化されているので、培った技能が十分駆使できるかも気がかりだ。

かの息子さん、電池の後ろの年月日を確認した（保証書の替わり？）。電池の寿命は２年程だが、時計が古いと電池が消耗するので、切れたら持参するようにと説明を受けた。この言葉の力の方が紙の保証書よりも安心できた。これが「時計のかかりつけ医」なのかな？　そして、後継ぎがいる店なのも大きな安心材料だ。

時計が元の位置に戻った。ふと見ると、置物の表書きには昭和63年とある。昭和も終わる頃の記念品だったのだ。うーん、30年は経過している。この間時計は電池を入れ替えながらも動いてきた。でも、かのオジサン、「最近は中国で組み立てるので中身はどのメーカーでも同じで外見や会社が違うだけだ」とか言っていたなあ。やはり、しっかりと働く日本製は逸品だ。

あの１級オジサンも昭和生まれでアナログ時計とともに暮らしてきたのであろう。いまだ現役の古い時計が同世代の職人魂をくすぐったようだが、頑固な蓋と悪銭苦闘している姿を見るとお疲れ様と声をかけたい。

ところで、修理の初歩の時計修理技能士３級は、裏蓋の開閉、パッキンの交換、バンドの取り換えが可能とある。蓋が開かないと１級の技術も生かせない。息子さんと分業すれば、優秀な技術が生かせるのに、全部一人でやろうとせずチーム力を大切にすべきだ。確かに、「人の振り見て我が振り直せ」の名言が筆者に重く圧し掛かる。

数週間後、別の時計が止まった。早速出向くと店番は息子さんの方だった。蓋はすぐ開いて、作業は順調に進んだ、ところが、外蓋を戻す時、防水のゴム製パッキンがはじけて飛んだ。「これでは防水にならない！」とつぶやくが、こんなパッキン１本で「防水」を強調していたのかと思うとこちらが驚く。パッキン交換は部品代込みで千円也。了承すると、棚からポケット付きのファイル（これも年代ものだが）を取り出し、時計の型番に合う１本を選んだ。ポケットの中に多種類のパッキンが入っていた。あれが千円札としたら、一冊のファイルだけで一財産だ。でも、ファイルの色褪せから見るとまだまだ眠ったお宝のままかも。

新しい電池で復活した腕時計もすでにふた昔の時をお互いに歩んできた同士だ。隣で見ていた妻がうなずく。時計に交換できる部品はあっても、人間の交換用パッキンはない。だから、切れる前の「かかりつけ医」があるのだろうなあ。ところで、あのオジサンの「電池」は元気かな？